

## PROGRAM NOTE

2008

近藤譲：ダンデリオン-クロック-ワーク

2台ピアノのための

**Dandelion-clock-work**

for 2 Piano

この作品は、四分音ずれて調律された2台のピアノのための3つの小品と、その間で演奏される2つの短い間奏曲（バス・フルート、チェロ、打楽器のアンサンブル）から成っている。但し、間奏楽章を省いて、2台ピアノのみの曲として演奏することもできる。題名は、「タンポポの綿毛坊主」を意味する'dandelion clock'と、「ぜんまい仕掛け」を意味する'clockwork'という2つの英語の言葉を繋げたもの。

四分音ずれた2台ピアノという編成を思うと、私は、チャールズ・アイヴズの傑作、《3つの四分音小品》(*Three Quarter-tone Pieces*)を思い出さずにはいられない。学生のときLPレコードで聴いたこの作品に非常に強い印象を受けた私は、それ以後、四分音を用いて作曲する場合はいつも、この作品を導きとしてきた。例えば、私の最初の四分音作品——4楽器（2台のギター、電気ピアノ、カウベル）のための《結ぼれ》*Knots* (1997年)——は、アイヴズの四分音和声法（その私なりの解釈）を基礎にしている。それに対して、この《ダンデリオン-クロック-ワーク》では、逆に、アイヴズの和声法を強く意識しつつも、そこから距離をとっている。但し、アイヴズの音楽の強い残滓は、第2曲の僅かな和絃的部分や、終曲の最後に現れるコラール風の楽句（アイヴズへの私なりのオマージュ）に明らかに見て取れるだろう。第1曲は、アイヴズが基礎にした5度と3度音程に代えて、7度音程を基礎にしている。又、一見和声的に見える終曲の大部分は、実のところ、極端に離れた音域に置かれた2つの声部による2声書法で書かれている。この2声書法が「和声的」に聞こえるのは、ちょうど15世紀のフォーブルドン様式のように、各声部が、6度音程（但し、ここでは、中間6度）で並行する副声部を伴っているからである。

《ダンデリオン-クロック-ワーク》は、アンサンブル・ボアからの委嘱で、2008年の2月に作曲された。

近藤譲

初演：2008年3月27日（東京 東京オペラシティ）

初演者：アンサンブル・ボア（2台ピアノ）

委嘱：アンサンブル・ボア

出版：University of York Music Press (UK)

演奏時間：8分